

つかりと矜持を保っている者もいました。従順ではあるが誇りは失っていませんでした。私は護衛隊に囲まれて近くに立っていました。その男たちをじっくり観察していたのです。突然、短く鈍い断続音が聞こえてきました。見ると、二十五歳と二十八歳の間ぐらいの年の若いユダヤ人が、わが方の警察将校をピストルで撃つてい。あつという間に三発発砲していました。一発は将校の掌に当たりました。われわれその場にいた者皆が、このユダヤ人に銃火を浴びせました。私もどうにかピストルをケースから引き抜いて、倒れようとしているユダヤ人の胴体に撃ち込むことができました。私は立ったままユダヤ人を見下ろしました——男は息絶えようとしていました。戦争術の法則というのはこんなものです。男は死にかけてはいたが、まわりをうらみのこもった目で見回しました。そして彼が何をしたと思いませんか。私に向かつてつばを吐きかけたのです。それを見た護衛隊の連中が——自動小銃で連続射撃を浴びせました。まるでべしゃんこになった血まみれの肉の袋のようでした」

私はそれを聞いていられなかった——しかし聞いていた。口がからからになった。グスターフ・シールケは水瓶のところを駆け寄ると、一息にコップの水を呑みほし

た。しばらくして看守が昼食を運んできた。シネトロップは二人前の囚人食をうまそうに平らげた。

\*

昼食が済み、食器洗いが終わり、そして監房の掃除が済んだあと（シネトロップはちょうど掃除当番にあたりていた）、グスターフ・シールケが、親衛隊師団指導者に、五月一日という日についてまだ何か面白いことを話さずはだつたことを思い出させた。シネトロップはあまりおしゃべりするのには気乗りがしないようだったが、シールケのねばりに負けて話し始めた。

「すでにゲッターの戦闘が一週間経ってから、私は、ユダヤ人が、夜中、猫のようにうろつき回っていること、その時に編成替えを行ない、通信を伝え、倉庫から食料と水と弾薬を運んでいること、また、われわれが発砲すると、それに銃撃で応えていることを示唆したという報告内容に興味を持ちました。打ち合わせの時にそれに注意を促しましたが、この問題をどう解決したらよいかの考えはありませんでした。ところが四月三十日から五月一日にかけての夜は、われわれにとって血みどろの夜になってしまいました。ユダヤ人たちが夜中に、部下三名

と親衛隊員二名を撃ち殺したのです。銃撃は十何回か続きました。副官は夜中に私を起こさねばなりませんでしたが。私はすっかり頭にきていました。新たな面倒が起ったのですからね。五月一日、この問題を議題にして、私は専門家たちと協議しました。ワルシャワの私は、屋間は捕虜を捕え、ユダヤ人を銃殺しているが、夜は部下が命を落とすにまかせている、という噂がワルシャワの我同国人の陰謀の世界で広まりました。

結局、アルフレート・シニビルカーがよい専門家を見つけ出してくれました。スコルツェニイ配下の大柄の若手将校でした。たまたまワルシャワに来ていたのです。彼はとても策にたけた、牽制運動の訓練を積んだ親衛隊員で、夜間パトロール隊を編成するように勧めました。しかも通常部隊ではなく、バルチザン部隊タイプのもので、夜間パトロール隊を編成するように勧めました。クリューガーは計画に同意し、十人の親衛隊員から編成されたという特殊部隊を五隊、直ちに活動に着かせ、次いで、万が一に備えて、さらに五つの類似の部隊を用意するようにと命じました。私は、数時間のうちに人選を済ませました（面白い仕事があるが志願者はおらんか？

——沢山の人が申し出ました。われわれは急いで彼らに指示を与えました。いちばんよく私の手助けをしてくれたのは例のスコルツェニイの降下部隊のシニビルカーと、驚いたことにカー博士でした。一体、あの無口な男、カーの知らないことは何もないのでしょうか」

「五月一日の二十二時、我新バルチザン部隊を送り出しました。ゲッター内の曲がりくねった道を、不規則な間合をとりながら捜すように命じました。彼らの任務は、敵の部隊とパトロールの動きをつきとめ、掩蔽壕を捜し出し、敵の様子を聴き出し、撲滅することでした。装備は最高級のものを与えてやりました。大量の弾薬つきの自動小銃、榴弾、ナイフ、発火信号ピストル、ゴム底の靴。外には光るものは一切つけず、顔は黒く塗り、軍服の下には、短剣もピストルの弾も通さない鋼鉄の針金で編んだシャツを着けるように命令しました。こうして、ゲッターのわれらが「夜間バルチザン活動」が開始されたわけです」

「さて、シールケさん、あなたには不可解だったこの用語を用いるとき、私が何を言っていたかもうおわかりでしょう。ワルシャワのユダヤ人たちが、私や私の部下の親衛隊員に、夜ごと、百万都市のどまん中でバルチ



ザン芸当をやらせることになるうなどと、一体誰が考えたでしょう。われわれにとって重要な戦略拠点であり、鉄道の要衝であり、補給・修理基地であり、全軍の駐屯地であり、強力な警察駐屯地である都市のまん中です」

「将軍殿、あなたは、わが国の党及び国家の祝日に、ゲットーで死に瀕しているユダヤ人に対するナチス・パルチザン隊長に任命されたわけですね。たいしたことですな。名譽の出世ですね、親衛隊師団指導者殿！」グスターフ・シールケはうすら笑いを浮かべて言った。

\*

「一九四三年五月二日、<sup>(トイト)</sup>東方正級親衛隊兼警察指導者、<sup>(トイト)</sup>親衛隊上級師団指導者、<sup>(トイト)</sup>警察將軍フリードリヒ・ヴィルヘルム・クリューガーがワルシャワにやってきました。

この人は国家社会主義ドイツ労働者党の幹部であり、最も優秀な親衛隊員のひとりでした。私の親衛隊身分証明書番号が四四六一一だったのに対して」とシントロープは話を続けた。「クリューガーの番号ははるかに小さいもので、たしか六〇〇〇の下でした。またミュンヒェン時代初期からの古参闘士、古参兵のクリューガーは、<sup>(トイト)</sup>アドルフ・ヒトラー、<sup>(トイト)</sup>ゲーリング、<sup>(トイト)</sup>ゲッベルス、<sup>(トイト)</sup>ハイムプはつけ加えた。「しかも私の考えだと、総督府統治区域の最重要人物です。ハインリヒ・ヒムラーも、かつてのレームとの間の複雑な関係に対する彼の立場についていろいろと取沙汰されていたにもかかわらず、クリューガーには絶大な信頼を寄せていました。エルンスト・レームはクリューガーに賭けたようですが、知恵者で大胆なクリューガーは——ハインリヒ・ヒムラーに賭けたのです」

「人種問題に造詣が深いクリューガーは、総督府統治区域のすべてのユダヤ人の撲滅ということをきわめて重要視していました。そこで、さんざん電話をかけては私を悩ませ、たえず監督してきたが、五月二日に、今度は自ら、突如姿を現わしたというわけです」

「彼は親衛隊上級師団指導者の制服のままゲットーに出かけるのを恐れませんでした。ベルベットの親衛隊將軍の襟章には、樞の葉が三枚ずつと四角星がひとつありました。將軍は私のあとについて、ゲットー戦線の最前線に出かけました。すべてに目をとめ、あらゆることに口を出しました。私に非常に多くの指針、指示、助言を与えてくれました」

「クリューガーは、<sup>(トイト)</sup>大作戦行動が非常に長引いているこ

リヒ・ヒムラーをよく知っており、多くのわが国の中心の指導者たちと親しくしておりました。彼の功績は広く知られていました。最初の時期に——一九二九年——一九三二年にナチ党のすべての重要なデモと活動を組織したのは他ならぬ彼でした。直接行動、われわれの政敵の集会の叩き潰し、路上での遭遇戦の指揮、そして突撃隊と親衛隊のための武器調達を専門にしていました」

「アドルフ・ヒトラーがいつか、公衆の前で、フリードリヒ・クリューガーは、<sup>(トイト)</sup>国家社会主義ドイツ労働者党最初の兵器係曹長であり、常に必要なだけのピストル、機関銃、榴弾を党細胞に、期限通り届ける才があった」と言ったことがあります。また、親衛隊帝国指導者が一度、冗談に、もしアドルフ・ヒトラーが、一九二九年に、クリューガーに対して、有名な「ベルタ砲」を「褐色館」に届けるように命令していたら、きつとクリューガーは、それをフランスから盗み出し、またたく間に部品に分解してミュンヒェンに密輸しただろう。たとえ税関や警察、諜報機関、ヨーロッパのスパイ網がみんなであって彼の邪魔をしたところでね、と言ったことがありました」

「クリューガーというのはピストルです」とシントロー

とを懸念していました。しかし、情勢がいかに困難なものになっており、ユダヤ人がどんなに頑強で決然としているか、一見ひどく柔弱に見えるユダヤ人でさえいかに素晴らしい戦闘員に一変するかを目のあたりにし、「ハルツの少女たち」を見、親衛隊将校らの報告とハーン、カー博士の見解を聞いたあとでは——彼は自分の考えを改めました。『この、われわれにとって新しい情勢のもとでは、電撃的な成功をおさめるのは容易でなかったことがわかった』——クリューガーは別れ際にこう私に言いました。そしてそのあと、『統けてやってくれたまえ。五月十五日には公式に大作戦行動を完了できるようにだといんだが。締めくくりは華やかでなくてはならない。政治宣伝的性格をもったフィナーレ——それはワルシャワの中央大会堂の爆破だ。シナゴグの壁に装薬を仕掛けるための穴をいつ、どのようにあけるか、イエズイターが技術面の計画書を受け取っている。計画を立て、見積りをしたのは、私のクラクフ司令部最高の工兵だ』

「クリューガーの視察は私にとって好結果に終わり、私の司令部と全兵隊の士気をたいへん高めました。クリューガーが一九三九年の十一月以来ポーランドにおいて、同



時に総督府政府の保安担当大臣の職も兼任していたことを忘れないで下さい」

「クリューガーのワルシャワ滞在中の同じ五月二日に、われわれは、約二千人のユダヤ人をゲットーの中で捕えました。また約五百人を射殺しました。さらに、二十七の掩蔽壕を発見し、力づくで制圧し、爆破しました。多くの武器と弾薬、そして地下食糧倉庫、大量の外貨、金、高価な宝石類を奪いました。クリューガーは屋根から飛び降りるユダヤ人男女もじっくり観察していました。ゲットーに落下傘兵を空中で射殺する技術を完成の域に到達させたある狙撃兵を表彰するように推薦せよ、と命じました」

「またクリューガーは、すべてを写真に収めるように命じました。『これは歴史にとって、総統、ハインリヒ・ヒムラーにとって、将来の第三帝国史の研究者、国家主義の詩人、作家にとって、親衛隊の訓練目的にとって、そして何よりもわれわれの努力を記録に残し、ヨーロッパと地球の非ユダヤ化のために、北歐人種とゲルマン人が払った大きな血みどろの犠牲を記録に残す上で、貴重な資料となるだろう』——クリューガーは、ウヤズドフスキエ大通りの私の事務所で行なわれた最後の会議で

こう述べました。あくる日、われわれは元気に仕事とりにかりました。ポーランド人の国家の祝日でした。作戦行動は午前九時に開始しました。ゲットー中、精力的に探し回る作業が始まりました」

「ゲットー全体をですか」と私が訊く。

「いや。ゲットー北東地域はまだ制圧していませんでした。そこにはユダヤ戦闘団の中核があったのです。蜂起司令部とその精鋭部隊がそこで活動しているという事はすでにわかっていました。夜間、ユダヤ人の戦闘隊、通信隊、擾乱工作隊が出てきたのはこの一帯からに他なりません」

「五月三日はねばり強い激しい戦闘を行いました。丸十二時間ぶつかり合ったのです。敵が掌握する戦闘員の腕はますます確実なものになっていきました。またもや『アーリア人』が姿を現わしました。直接衝突しあうことがどんどん多くなっていきました。二丁の拳銃を発砲するという、ユダヤ人による曲芸師的な銃撃の例が数多くみられました」

「捕えた者たちが、武器を巧みに隠し持っていて、輸送の列に加わっている時や、私の部下の情報将校の尋問の時になって初めてそれを使うという事実が確認されまし

た」

「そこで私は」とシュトロープは続けた。「その日からは、捕えた者は全員、塹壕で服を脱ぎ、裸になること、わが方の歩哨は、武器を直ちに使用できる態勢で（脱衣中の者たちから五十メートルの距離を置いて）見張っていることを命じました。そのあと、この裸ん坊たちは男も女も一列になって、左へ五十メートル走らなければなりませんでした（すつと両手を上げたままです）。別の歩哨隊が自動小銃で監視しているところへです。地面に転がっている衣類が（初めの歩哨グループによって）徹底的に調べられたあと、裸ん坊たちは再び駆け足で戻ってくるか……戻らないかのいずれかでした。戻ってくれば、貨車に向かいました」

監房の中が暗くなった。ちょうど黒い渦巻き雲が近づいて来たためだった。十一月の風が巻き上がった。砂ほこりと枯れ葉と紙切れの渦が、われわれの窓の下まで吹き寄せられた。監房の中に刺すような寒気が浸入してきた。扉のそばに立っていたシュトロープが、シルルケに向かって怒鳴った。

「さっさと窓を閉めたまえ。風で窓ガラスが割れるじゃないか！」

そしてそのあとで言った。

「あのゲットーの塹壕で裸になっていたユダヤ人たちは、きつと今のわれわれのように寒くなかったはずだ。日なただったからね。五月三日は暖かくて、夏みたいでした。ひとりの女などは、体が赤味を帯びた、きれいな褐色に焼けたほどでした」

「將軍殿が美しい馬と騎馬術、それにラデツキー行進曲に目がないことは知っていましたが」と私は言った。「日焼けした女の肌、『アーリア人』でも『北歐人種』でもない女の肌の魅力も將軍殿の心を動かすとは、はじめて知りましたね。確かに、洗濯場の、一級品の乳房をもったしじゅうからことスラヴ人女囚の話をするときのあなたの感想から推測できたことですがね。ほら、將軍が、散歩中や、時には窓から盗み見もしていた例の女ですよ」シュトロープは激昂した。その目には人をしてたじろがせるものがあった。おそらく、こんな目で、ゲットーで聞いうダヤ人を見ていたに違いない。

\*

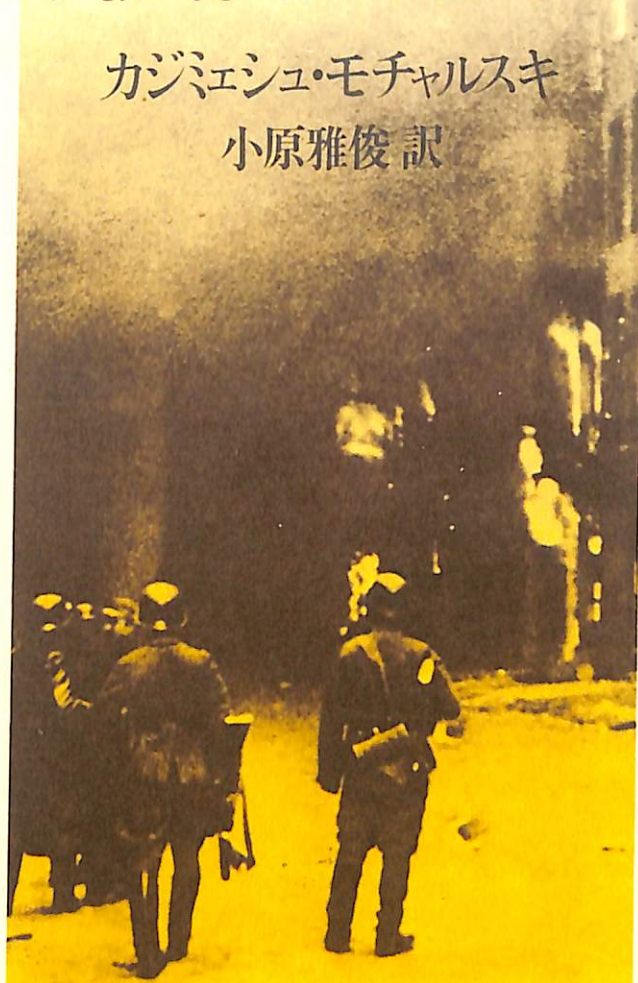
「五月二日のクリューガーの視察のときと五月三日とは、部下を数人ずつ失ったのに対して」とシュトロープ



# 死刑執行人との対話

カジエシユ・モチャルスキ

小原雅俊 訳



R O Z M O W Y  
Z  
K A T E M

ratslagern heranschafften und unser Feuer erwiderten. Während der täglichen Lagebesprechungen machte ich meinen Stab auf diese Tatsachen aufmerksam, aber ich besaß noch keine Konzeption, um dieses Problem zu lösen. Besonders blutig endete für uns die Nacht vom 30. April zum 1. Mai. Die Juden hatten drei unserer Männer verwundet und zwei SS-Leute erschossen. Der Feuerwechsel fand während dieser Nacht mindestens ein dutzendmal statt. Mein Adjutant musste mich nachts sogar wecken. Ich war wütend, denn das sah nach neuen Schwierigkeiten aus. Am 1. Mai führte ich mit mehreren Fachleuten Besprechungen. Mittlerweile liefen unter meinen intriganten Landsleuten in Warschau boshafte Gerüchte um, dass ich zwar am helllichten Tage Juden gefangen nehme und erschieße, dafür aber nicht verhindern kann, dass nachts Verluste unter unseren Soldaten eintreten.

Schließlich machte Alfred Spilker einen Experten ausfindig, einen jungen, kräftigen SS-Offizier der Skorzeny<sup>7</sup>-Einheit. Er war zufällig in Warschau. Dieser junge Offizier riet uns, aus den geschicktesten und in Sabotageakten besonders ausgebildeten SS-Männern nächtliche Patrouillen zusammenzustellen, allerdings nicht als reguläre Einheit, sondern als eine Art Partisanengruppe. Ich telefonierte mit General Krüger, der früher ein Fachmann sowohl für Tages- als auch für nächtliche Straßenkämpfe gewesen war. Krüger akzeptierte den Plan und ließ sofort fünf solcher Patrouillen zu je neun SS-Männern aufstellen; außerdem wurden auf alle Fälle zusätzlich noch fünf ähnliche Gruppen zusammengestellt. Innerhalb weniger Stunden hatte ich meine Leute beisammen. (Wer meldet sich freiwillig für eine interessante Arbeit? – Es meldeten sich viele.)

In aller Eile wurden die Männer instruiert. Der Fallschirmjäger von Skorzeny war mir eine große Hilfe, und, o Wunder, auch Dr. Kah. (Es gab wohl nichts, worin sich dieser so unscheinbar wirkende Kah nicht auskannte?!)

Am 1. Mai pünktlich um 22 Uhr setzte ich meine neue Partisaneneinheit in Marsch. Ich befahl, auf Schleichwegen und in unregelmäßigen Zeitabständen das Ghetto zu durchkämmen. Die Männer hatten die Aufgabe, alle Bewegungen der gegnerischen Gruppen

<sup>7</sup> Gemeint ist SS-Obersturmbannführer Otto Skorzeny, der am 12. Sept. 1943 einen Trupp von 90 Soldaten des Fallschirmspringer-Schulungskommandos anführte, welcher mit Hilfe von zehn Segelgleitern Benito Mussolini aus dem Hotel Campo Imperatore in den italienischen Abruzzen befreite.

aufzudecken, Bunker ausfindig zu machen, auf jegliche Geräusche zu achten und den Feind rücksichtslos zu liquidieren. Sie waren hervorragend bewaffnet: Maschinenpistolen mit großen Mengen an Munition, Handgranaten, Messer, Leuchtpistolen, Stiefel mit Gummisohlen. Von den Uniformen waren alle blitzenden Knöpfe oder Litzen entfernt worden. Die Gesichter waren dunkel geschminkt. Unter den Uniformjacken trugen die Männer Hemden aus Kettendraht, die kein Stilet und keine Pistolenkugel durchdringen konnten. So begann die Arbeit unserer »Partisanennacht« im Ghetto.

Jetzt wissen Sie, Herr Schielke, was ich mit dieser für Sie unverständlichen Bezeichnung gemeint habe. Wer hätte es gedacht, dass die Warschauer Juden mich und meine SS-Männer zwingen würden, Nacht für Nacht im Zentrum einer Millionenstadt eigene Partisaneneinsätze durchzuführen! In einer Stadt, die für uns strategisch wichtig war, als Eisenbahnknotenpunkt, Versorgungs- und Nachschubbasis. Dazu Standort von Garnisonen aller Waffengattungen und einer starken Polizeieinheit.«

»Am Tage unseres Partei- und Staatsfeiertages wurden Sie, Herr General, zum Einsatzchef der Hitler-Partisanen im Kampf gegen die im Ghetto sterbenden Juden ernannt. Eine große Sache und eine ehrenvolle Beförderung, mein SS-Gruppenführer!«, bemerkte Schielke mit einem schiefen Lächeln.

»Am 2. Mai 1943 kam der Höhere SS- und Polizeiführer Ost, SS-Obergruppenführer, Polizeigeneral Friedrich Wilhelm Krüger, nach Warschau. Krüger war ein führender Mann der NSDAP und einer der einflussreichsten Mitglieder der SS«, fuhr Stroop in seinem Bericht fort. »Während ich SS-Mitglied Nr. 446111 war, hatte Krüger eine wesentlich niedrigere Nummer, so um die 6000 herum<sup>8</sup>. Krüger, ein bewährter Kämpfer der alten Garde noch aus den ersten Münchner Jahren, kannte Adolf Hitler, Göring, Goebbels und Heinrich Himmler persönlich; außerdem duzte er sich mit mindestens einhundert der wichtigsten Parteiführer. Seine Verdienste waren allgemein bekannt. Er organisierte in der Frühzeit der »Bewegung«, zwischen 1929 und 1932, alle wichtigen Aktionen der NSDAP, wobei er sich besonders auf direkte Einsätze spezialisiert hatte, zum

<sup>8</sup> SS-Obergruppenführer Friedrich-Wilhelm Krüger hatte den SS-Ausweis mit der Nr. 6123.

Beispiel auf die Sprengung von Kundgebungen unserer politischen Gegner, auf Straßenkämpfe und auf das Beschaffen von Waffen für die SA und SS. Adolf Hitler hatte einmal öffentlich erklärt, dass Friedrich Krüger der »erste Waffenmeister der NSDAP gewesen sei und es stets verstanden hätte, jeder Parteizelle rechtzeitig die notwendige Zahl von Pistolen, Maschinengewehren und Handgranaten zu liefern«. Und der Reichsführer SS scherzte gelegentlich, dass Krüger, hätte ihm Adolf Hitler im Jahre 1929 befohlen, dem Braunen Haus die berühmte »Dicke Berta« zu liefern, das Geschütz den Franzosen unverzüglich gestohlen, es blitzschnell in Einzelteile zerlegt und auf dem kürzesten Wege nach München geschmuggelt hätte, auch wenn sämtliche Zöllner, Polizisten und Geheimagenten Europas versuchten, es zu verhindern.«

Stroop fuhr fort:

»Krüger war meiner Meinung nach der wichtigste Mann im Generalgouvernement. Heinrich Himmler vertraute ihm uneingeschränkt, obwohl es verschiedene Gerüchte gab hinsichtlich der Haltung Krügers, angesichts der seinerzeit schwierigen Beziehungen zwischen Heinrich Himmler und Röhm. Ernst Röhm soll damals auf Krüger gesetzt haben, der vorausschauende und mutige Krüger dagegen auf Heinrich Himmler.

Krüger, ein ausgezeichnete Kenner der Rassenfrage, legte größtes Gewicht auf die Liquidierung aller Juden im Generalgouvernement. Deshalb überschüttete er mich mit Telefonanrufen, kontrollierte alles und erschien am 2. Mai unerwartet selbst in Warschau.

Dabei hatte er keine Bedenken, in voller Uniform eines SS-Obergruppenführers ins Ghetto hineinzufahren. Auf den Samtpatten seines Kragens trug er je drei Eichenlaubranken mit dem viereckigen Stern eines SS-Generals. Er ließ sich von mir bis in die vorderste Linie der Ghettofront bringen. Er bemerkte jede Einzelheit, mischte sich in alles ein und gab mir eine Menge Anweisungen und Instruktionen.

Krüger war beunruhigt, dass sich die Großaktion so sehr in die Länge zog. Als er jedoch an Ort und Stelle feststellte, wie schwierig die Lage geworden war, wie hartnäckig und entschlossen sich die Juden wehrten, da sich jeder von ihnen aus einem scheinbar verweichten, degenerierten Individuum in einen fanatischen Kämpfer verwandelte, als er die »Haluzzenmädel« sah, sich von SS-Offizieren

Bericht erstatten ließ und schließlich die Meinung von Hahn und Dr. Kah eingeholt hatte – da änderte er seine Meinung. »Ich verstehe, dass es angesichts der für uns vollkommen neuen Lage schwer war, rasche Erfolge zu erzielen«, erklärte mir Krüger beim Abschied. Und er fügte hinzu: »Arbeiten Sie weiter. Es wäre gut, wenn die Großaktion am 15. Mai formell abgeschlossen werden könnte. Dieser Abschluss muss wie ein Feuerwerk gestaltet werden. Als letzten Akkord im politischen und propagandistischen Sinne stelle ich mir die Sprengung der größten Warschauer Synagoge vor. Jesuiter hat bereits alle technischen Pläne, wie und an welchen Stellen Öffnungen in die Mauern der Synagoge gebohrt werden sollen, um die Sprengladungen anzubringen. Den gesamten Plan hat der beste Pionierfachmann in meinem Krakauer Stab ausgearbeitet und berechnet.«

Krügers Inspektionsbesuch war für mich positiv verlaufen und trug erheblich zur Verbesserung der Stimmung unter meinen Stabs-offizieren und allen Soldaten bei. Bedenken Sie, dass Krüger sich schon seit November 1939 in Polen aufhielt und gleichzeitig Staatssekretär für Sicherheitsfragen bei der Regierung des Generalgouvernements war.

Während der Anwesenheit Krügers in Warschau nahmen wir an diesem 2. Mai im Ghetto ungefähr 2000 Juden fest, etwa 500 wurden erschossen; wir eroberten und sprengten 27 Bunker. Eine große Zahl von Waffen und Munition fiel uns dabei in die Hände, außerdem fanden wir unterirdische Lebensmittellager, eine Menge ausländischer Valuta, Gold und wertvollen Schmuck. Krüger sah sich auch die von den Dächern herunterspringenden Juden an. Er befahl, einen Scharfschützen, der eine besondere Fertigkeit beim Abschießen dieser durch die Luft segelnden »Ghetto-Fallschirmspringer« erlangt hatte, für eine Auszeichnung vorzuschlagen.

Außerdem ordnete Krüger an, jede Einzelheit zu fotografieren. »Das ergibt ein unschätzbares historisches Material für den Führer, für Heinrich Himmler und für die künftigen Erforscher der Geschichte des Dritten Reiches, für unsere nationalsozialistischen Dichter und Schriftsteller und für Schulungszwecke der SS. Vor allem aber wird dieses Material dokumentieren, welche Anstrengungen es kostete und welch schwere, blutige Opfer die nordische Rasse und die Germanen für die Entjudaisierung Europas und der ganzen Welt bringen mussten«, erklärte Krüger während der abschließenden

Lagebesprechung, die er in meinem Hauptquartier in den Aleje Ujazdowskie abhielt. Am nächsten Morgen gingen wir wieder forsch an die Arbeit. Es war der 3. Mai, ein polnischer Nationalfeiertag. Die Aktion begann um 9 Uhr. Mit neuer Energie wurde das Ghetto durchkämmt.«

»Das gesamte Ghetto?«, frage ich.

»Nein. Den nordöstlichen Bezirk hatten wir noch nicht erobert. Dort befand sich das Zentrum der jüdischen Kampforganisation. Wir hatten bereits in Erfahrung gebracht, dass dort der Stab der Aufständischen und ihre Eliteeinheiten zusammengezogen waren. Aus diesem Teil des Ghettos heraus operierten nachts die jüdischen Kampfgruppen, ihre Nachrichtentrupps und Sabotageeinheiten.

Am 3. Mai waren die Kämpfe wieder besonders hart und erbittert. Volle zwölf Stunden wurde gekämpft, während der Gegner über immer gründlicher ausgebildete Widerstandsleute verfügte. Wieder tauchten »Arier« auf; immer häufiger kam es zu Nahkämpfen. Die Juden, darunter auch Frauen, schossen oft mit zwei Pistolen gleichzeitig, wie im Zirkus.

Immer wieder mussten wir feststellen, dass die Gefangenen ihre Waffen so geschickt in ihren Kleidern versteckten, dass sie erst in den Reihen der Transportkolonnen und sogar während der Verhöre durch meine Nachrichtenoffiziere von ihnen Gebrauch machten.«

Im gleichen Atemzug fuhr Stroop fort:

»Ich befahl deshalb, dass sich ab sofort alle Festgenommenen an einer Mauer bis auf die Haut auszuziehen hatten und dabei von unseren Bewachungsmannschaften mit schussbereiter Waffe in einer Entfernung von 50 Metern beobachtet werden sollten. Anschließend mussten die nackten Frauen und Männer einzeln etwa 50 Meter nach links hinüberrennen, und zwar mit erhobenen Händen, wo eine andere Wacheinheit mit Maschinenpistolen bereitstand. Nachdem der erste Bewachertrupp die auf dem Boden zurückgelassenen Sachen gründlich durchsucht hatte, liefen die Nackten zu ihren Kleidern zurück – jedenfalls die meisten ... Diejenigen, die sich wieder anziehen durften, wurden in die bereitstehenden Viehwaggons geschafft.«

Schwärzliche Wolken türmten sich am Himmel, Dämmerung fiel ein. Der scharfe Novemberwind trieb Staubwolken, Blätter und Papierfetzen unter unser Fenster. In der Zelle herrschte durchdringende Kälte. Stroop, der in der Nähe der Tür stand, schnauzte Schielke

an: »Schließen Sie sofort das Fenster, sonst zerschlägt der Wind die Scheiben!«

Nach einer Weile fügte er hinzu:

»Diesen Juden, die nackt an der Ghettomauer standen, war es bestimmt nicht so kalt wie uns jetzt in der Zelle; damals schien ja die Sonne. Der 3. Mai war ein warmer, fast sommerlicher Tag. Eine Jüdin hatte sogar einen wunderbar braungebrannten Körper, mit einem rötlichen Schimmer auf der Haut.«

»Mir ist zwar bekannt, dass Sie, Herr General, rassige Pferde, das Reiten und den Radetzkymarsch besonders mögen«, meinte ich, »aber zum ersten Mal höre ich, dass Sie auch für die Schönheit einer sonnengebräunten Frauenhaut, noch dazu einer »nicht arischen«, empfänglich sind. Ich hätte es mir zwar denken können, nach Ihren Bemerkungen über die slawische »sikorka« mit dem Klassebusen, die aus der Gefängniswäscherei. Ich meine jene, die Sie auf Ihren Spaziergängen und zuweilen auch von unserem Fenster aus beobachten.«

Ich hatte Stroop bis aufs Äußerste gereizt; in seinen Augen blitzte es wieder metallisch auf. Sicherlich hatten sie den gleichen Ausdruck, wenn er im Ghetto die um ihr Leben kämpfenden Juden beobachtete.

»Am 2. Mai, während der Krüger-Inspektion, sowie am 3. Mai hatten wir einige Gefallene zu verzeichnen«, erzählte Stroop an einem der nächsten Tage. »Dafür gab es am folgenden Tag, einem Dienstag, überhaupt keine Verluste, obwohl wir im Verlauf eines dreizehnstündigen Kampfes eine Reihe von Gebäuden der Firmen Walter Többens und Schulz AG säuberten, 2300 Juden lebend fassten und 200 erschossen haben ...«

»Herr Gruppenführer«, fiel ihm Gustav Schielke wütend, fast leidenschaftlich, ins Wort. »Ich bitte Sie schon zum zweiten Mal, gefälschte statistische Angaben über unsere Gefallenen und Verwundeten nicht zu wiederholen. Ich weiß, dass Sie in Ihren täglichen Meldungen, die der Zauberkünstler Max Jesuiter verfasste, so vorgehen mussten, denn Krüger hatte es befohlen und Dr. Hahn Ihnen dazu geraten, und weil Sie sich schließlich nicht mit der Verantwortung für das Leben jener Soldaten und Polizisten belasten wollten, die unter Ihrem Kommando gefallen waren. Aber uns, Ihren Mithäftlin-



Osburg Verlag

# KAZIMIERZ MOCZARSKI GESPRÄCHE MIT DEM HENKER

Das Leben  
des SS-Generals  
Jürgen Stroop.  
Aufgezeichnet im  
Mokotów-Gefängnis  
zu Warschau

Mit einem Geleitwort  
von Ge

千葉大学附属図書館



20010012408